

窓辺

佐久間病院

いけの
池野 文昭
ふみあき

1997年から4年間、

北遠の山間部にある佐久間病院に赴任した。赴任前は正直、都市部から離れた超高齢化社会が進む町の小さな病院で医師として勤務するのに困惑したのを覚えていた。これから始まる4年間で、すくなく長く感じた。しかし、赴任直後、それは全くの杞憂であると感じた。

住めば都、すぐに佐久間町の生活に打ち解けた。その一番の理由は、住民の皆さまに非常に良くしていたからである。家庭医だったので、患者様と家族

ぐるみの付き合いだった。

病院や診療所での診療だけでなく、往診もよくした。最先端ではないが、できる範囲で患者様に最良となる治療をした。

当時、佐久間町の高齢化率は40%。65歳以上の高齢者が全人口の4割を占めることを意味する。お年寄りがたくさんいる町だった。

祖父母を早く亡くした私は、お年寄りを祖父や祖母のように思い接した。そして一番大事な経験は、4年間で非常に多くの方の死をみとらせていただいたこと

だ。100人は優に超えていた。

30歳の人間が、多くの人の死に立ち会うということは非常につらいものだった。しかし、多くの患者様たちから人生の重要な事を学んだ。

「人生は一度しかない」

「人生は長いようで短い」

この二つの言葉は、既にこの世を去った患者様たちから教えていただいたものだ。私がその後の人生で重要な岐路に立った時、大きな影響を与えている。それから約20年。この佐久間町での4年間の医師としての経験は、私の人生にとって非常に大切な宝物だ。

スタンフォード大
主任研究員、医師